

令和7年度 第1回山梨県考古博物館協議会議事録

1. 日 時 令和7年11月18日(火) 14:00～16:00

2. 場 所 風土記の丘研修センター 講堂

3. 出席者

(委 員) 12名

(事務局) [文化振興・文化財課] 1名

[考古博物館] 7名

(1) 開会

(2) 委員紹介

(3) 館長挨拶

(4) 議事

(5) 閉会

4. 会議に付した事案等について

○令和6年度 考古博物館事業実績について

○令和7年度 考古博物館事業経過・予定について

○考古博物館利用状況について

○その他

・デジタルアーカイブの導入について

・重要文化財の指定について

5. 議事録の概要

○令和6年度 考古博物館事業実績について

・冒頭事務局より令和6年度考古博物館事業実績に関する説明があった。

(委 員) 学芸員・教育主事によるガイドの実施は年間通して実施しているのか。

(事務局) その通り。

(委 員) 3月の「考古博物館 de 春まつり」は具体的にどのようなことをしたのか。

(事務局) ミニチュアの土器づくりや、博物館内のクイズラリーなどを実施した。

(委 員) イベントの実施について、SNS等で実施した内容が見れるようになっているか。

(事務局) Facebook等で発信をしている。多くの方に見ていただいている。

(委 員) イベントの際に、イベント用のハッシュタグなどを活用しているか。

(事務局) イベント関連のハッシュタグは使っていない。

○令和7年度 考古博物館事業経過・予定について

- ・冒頭事務局より令和7年度考古博物館事業経過・予定に関する説明があった。

(委員) 考古博物館で実施している各種事業については、どこで情報が見られるようになっていくのか。

(事務局) 当館のホームページで情報を公開している。当館で発行している「博物館だより」にも年間の予定表を掲載している。「博物館だより」は県内の図書館や博物館、学校や県外などにも幅広く配布をしている。

(委員) 学校関係は、県内の小中学校のPTAにも広報をしているか。

(事務局) PTAを経由して配布が出来ないか、前回の協議会の時に話が出たが、話が進んでいない状況。学校のペーパーレス化も進んでおり、配布が難しい。

(委員) メールでの配信はされているので、メール配信であれば配布は可能だと思う。

(事務局) 教育委員会で情報の取捨選択がされ、情報を受け取っていただけている学校とそうでない学校がある。すべての学校に届いているわけではない状況で、どのように広報をしていけばよいかという中で、前回の協議会でもPTA協議会経由での広報の話が出たところ。

(委員) 自分の子どもも遺跡発掘体験などが好きで、資料に記載されている事業予定を見ても、子どもが好きそうな事業も多いが、自分のところに情報が届いていないため、情報を伝えられていない。引き続き広報の方法を検討していただければと思う。

(事務局) 広報の方法について検討を進めていく。

(委員) 考古学講座は6月・7月に集中しているが何か理由があるのか。山梨は農業もさかんであり、農業関係の方はこの時期は繁忙期で参加しにくいので、それ以外の時期にも実施を検討してほしい。

(事務局) 来年は分散して実施できるよう検討する。

(委員) 夏季企画展を拝見したが、小規模ではあるが、説明がわかりやすく見ごたえのある内容で良かったと感じている。現在実施しているパプアニューギニア関係の特別展は、現時点で来館者数はどの程度か。順調に推移しているか。

(事務局) 11月16日までの推移として、46日間の開催日数で、4,383人となっている。昨年度と比較すると、若干少なくなっている。学校見学が減っていることが大きい。クマの目撃情報もあり、入館者数に影響している。

(委員) 来年1月31日から4月5日まで実施予定の「風土記の丘望見展」の実施内容はもう決まっているのか。

(事務局) 現在内容を検討しているところ。

(委員) 「風土記の丘望見展」という名前から、展示内容を風土記の丘に絞っているのかと思ったが、過去の実施内容を見るとそうではないので、どのようなテーマで実施しているのか。

また、1月31日からということであるが、まだホームページに載っていなかったなので、早めに内容を決めてホームページに掲載してほしい。

(事務局) 基本的には風土記の丘研修センター付近の「上の平遺跡」など、風土記の丘に関する展示を実施しているが、毎年風土記の丘に限定すると内容が重複することが多いため、違う内容も入れながら実施している。今年度の内容についても、なるべく早めにホームページに掲載できるように進めていく。

(委員) PRに関して、例えば、発掘した場所に該当する市町村の小中学校に積極的に話をするなど、攻めのPRも考えていただきたい。

(事務局) 攻めの姿勢でPRするよう取り組んでいるところではあるが、なかなか学校へのPRが難しい状況。この状況の中で、どのような方法がとれるか、引き続きPR方法を検討していく。

(委員) 自分が所属する小学校は、ここから30分くらいの場所にあるが、郊外学習の候補地に考古博物館が挙がっていない。小学校では、次年度の計画が決まるのは12月末頃。それ以降の時期に、校外学習のPRをされてもすでに決定していて検討の余地がない。できれば11月か12月当初くらいまでに、こんな校外学習ができるというプランを3つほど挙げて周知していただければ、教員の方も検討してみようという風になると思う。学ぶ要素、遊ぶ要素、広い公園での昼ご飯などができる良い場所だと思う。教員も新しい候補地を開拓する余裕がない部分もあるため、なるべく早い時期にPRしていただけると良い。地元の子どもたちが校外学習で訪れて、良かったという話を親に伝えてリピーターになっていくような流れが出来ると良い。

(事務局) 学校向けの案内を作って配布はしているが、その時期が例年2月頃になっている。年度毎に作っていて、今年度も1月・2月に配布するようなスケジュールになってしまう。来年度は、学校での計画が決定する前の11月や遅くとも12月上旬には配布できるようにしたい。

(委員) 学校にパンフレットを送ってもらうことがあるが、家庭数に配布する枚数はない。廊下に貼ったとしても、小学生には難しくて読めないことも多いため、やはり親向けということになる。授業参観の際などにコーナーを設けて掲示しているが、なかなか活用しきれていない。配布を受けた小学校側でもどうやって保護者に周知すればいいのか、というのがあられると思う。

(委員) 高校での周知の方法について、高校は教科が中心になっており、考古学というと社会科になるが、社会の教員が集まる部会というのがある。県立博物館では、担当者が来て説明をしている。そういう機会に情報提供だけでも良いので、チラシをいただくなどすれば各学校に行きわたることになるし、直接来て話をさせていただくことも可能。

また、高校は県立学校なので直接いろいろなところからチラシが送られてくる。教育委員会による制限もないので、校長会などの場で各学校分をいただければ、各クラス1枚ずつ配布することも可能なので、確保していただけたらと思う。

(事務局) これまで小中学校向けにはそういった取り組みをしてきたが、高校向けには実施していなかった。ぜひ活用させていただきたい。

(委員) 考古博物館協力会では、子どもまつりなどのイベントの時や、資格のある方が展示のガイドをしたり、協力会が大きな役割を果たしていると思うが、宣伝もかねてこんなことをやっているという話をお願いしたい。

(委員) 協力会では、学校教育関係や一般の方向けの説明などを行っている。解説することで喜んで帰っていただくことも多い。しかし、来てくれた方については解説が出来るが、そういう機会が少ない状況にある。もっと機会が増えたらよいと思うし、協力会として少しでも助けになればと思っている。

○考古博物館利用状況について

・冒頭事務局より考古博物館利用状況に関する説明があった。

(委員) 前回の協議会の中で、長期の推移も掲載するよう話があり、今回から掲載されていて、非常に分かりやすくなったと思う。過去からの入館者数の推移で、特別展の入館者数が大きく増えている年があるが、この時の特別展は何を実施したのか。

(事務局) 平成7年度は「黄金の都シカン発掘展」を実施し、入館者数が約9万人。平成19年は「世界遺産ナスカ展」を実施し、約5万人、平成24年度は「インカ帝国展」を実施し、約6万5千人となっている。

(委員) 知名度のあるところの内容だと、入館者数も大きく増えるということだと思う。人気のもの、そうでないものの差があると思うので、そこが反映されると良いと思う。

(委員) 外国人利用者数の集計については、どのように行っているのか。

(事務局) 受付の際に、お話されている言葉などを踏まえて、集計を行っている。

(委員) 学校見学の市町村別の内訳をみると、市町村によってかなりばらつきがある。先ほど周知方法の話もあったが、私の市では、チラシなどは全てデータ化して各学校へ送っている。各学校でも全てデータで配布するようにしている。そのため、私の市では参加者も多いので、成果が出ているものと思う。他の市町村でも、この取り組みは進んでいくと思うし、そうすれば、各市町村の利用者も増えてくるというのは想定される。

(委員) 学校見学で、長野県や静岡県など、近隣の県での利用者が少ないことに驚いた。コロナ禍では、遠くに行けずに近隣の県からも来ていたという話を聞いたことがある。山梨県は魅力のある場所だと思うので、近隣の県や、遠くの県からも、情報をキャッチしてもらえるようになったらいい。

(事務局) 確かにコロナ禍には近隣県での利用があったが、最近は東京都内が中心となっている。広報については引き続き検討したい。

(委員) 都内だと、山梨県人会の活動が活発。県人会連合会でも、総会などで500人規模で集まるような会が年に1回ある。そういうルートでもPRができればいいと思うが難しいか。

(事務局) 大阪と東京の県人会には資料の配布をしている。その他の配布先も検討していきたい。

○その他（１）デジタルアーカイブの導入について

- ・冒頭事務局よりデジタルアーカイブの導入に関する説明があった。

（委員）デジタルアーカイブは、収蔵品をデータ（画像）で紹介するというもので、県立博物館で行っている収蔵資料案内のようなものに近いイメージか。

（事務局）その通り。検索などをして、画像等を含めて情報を提示していくようなもので、県立博物館や県立文学館ですでに導入しているものと同様のイメージ。

（委員）導入後は考古博物館のホームページからデジタルアーカイブに入っていくことになると思うが、できるだけダイレクトにページたどり着けるような、わかりやすい見せ方にしてみたい。

（事務局）導入に向けて、アクセスがしやすい形になるよう検討していきたい。

（委員）資料に記載のある「博物館の行う目的」とはどのようなことか。

（事務局）博物館法の改正に伴い、必ずデジタルアーカイブを作るようになっている。文化庁における今回の目的としては、一つにＡＩ対策がある。ＡＩが一般の方、特に若者世代にとって普通のツールになっている。ＡＩはインターネット上の情報を集めている形なので、博物館がしっかりと情報を発信していかないと、ＡＩも正しく情報が作れない、嘘の情報が作られてしまうということが考えられる。

もう１点は、海外からのアクセスという点がある。英語圏ではないこともあり、海外からは日本の文化財関係の情報が出てこないという状況があり、海外から日本のことを知ってもらう時に、距離感が近くなるようにという目的があって、デジタルアーカイブを推進している、というのが文化庁から示されているところ。

（委員）デジタルアーカイブには、公開時の情報として日本語での説明もつくと思うが、多言語化での表示は考えているのか。

（事務局）現時点で、自前のシステムでは考えていないが、画像の形式は国際的な規格であるトリプルアイエフ（IIIF）とする。また、「ジャパンサーチ」という、国が進めるデジタルアーカイブを横断的に検索・閲覧できるサイトがあり、そこへの掲載も考えている。

（委員）デジタルアーカイブがこれからどう発展するか、期待している。一般利用者向け、研究者向けというところで、情報の内容も変わってくると思う。掲載計画を見ても、2027年度末で100点と、予算規模的にもあまり大きくはないと思うが、長い目で少しずつでもいいから充実させていってほしい。

○その他（２）重要文化財の指定について

- ・冒頭事務局より重要文化財の指定に関する説明があった。

意見・質問事項なし。

以上